# 幽郷真語

全

伊地知文庫
文庫20
445

幽郷眞語たしかゝ

伊地知氏書冊

今はむかし我が友ふ。本村何某と云ふ人ありて。呼名を力藏と云ひき。裝束れ衣紋といふこゝを習ひて。いろく人ふ交はる人ありけるに。今指をゝりて數ふれば。文化三年といひし年ゝ春の頃ありしが。語りけるは。此ごろ薩摩國ちくらの殿の御内なる。伊木何某てふ人ゝ聞る事ありて。そは彼国の霧嶋山ゝ出る。明礬を製らるゝ所ふ使ハるゝ小者ゝ何某とゝ

云男有て。ゐる日おもかへぞ。彼山ゑ鎮まて居まし
女仙の許ゑ行くらしゞ。其後もをりくゝ往來して。
志ゝくれまゞるゐてゐる由。詳ゐ知く知と語ゐる
を。已もとよて。然るもぞぢれ事どもは。おわろゐ聞
おゞし得ぬ性おれぞ。いくで其をのゑゑ直ゑ爲て。
問はゞやと思ゑど。國放ゐくばせむ便おくせ免て
はその伊木氏ゑ。あゞゐ聞バやと思ゑ。其知てさゑ
れくて過し奴るを。其後知ゑ此事の忘られぜ年

ふる間ゑ。顯世幽世のちゐし別おる故由をも。さ知く
ゐ委く思ひ得るゐ就てハ。霧島山ゐる神界ゐとれ。
いゐぞゝくと思ゑわゝて。ゐ知ゑ。前のおと知年ゐかの
御内おる大橋昌尚てゐ人。初めて我門ゑ入ゐるよて。
其紹介ゐて。其国の殿人ゐちも。次ゝゐゐ名簿
を遣せて。教へ子と知も。ゐ知中ゐ。木村鈴滿と云ゐ人
あて。呼名を休右衛門といゐ。歌もよく詠み。書知め
ゐる物もおれゐも有てと聞おるゐ。彼をのこゞ。霧島

山の神のさゝいふ至き法實を尋ぬれバ其いと正
し紀物語りあり吾も久しく聞おゞら居ゐれど今師
のかく問ゑまへゞ国ふ帰らむ後ふ友さひとひ正
して書記し見せ奉らむと云ふふ返らく勸めてや
ゐ切さて後ふ消息にるゞいとふ何ゐくと催がしやき
ほふ猶聞ゑてぬ事ものゝバ熟くとい畢てこそと云を
いと待ゑふる間ふ悲しゐたゝも去年ゐ五月ふ鈴滿
ハしも身ほゝゑぬ故また誰ふゝも訛へむと歎き居

ゐるふ今ゝしまゝ池田武純といふ人の來れるふ
此事を問へゞをゝく聞ゑもてる事もゞ有ると
やゞて其事ども紀記し見せて猶國かる友ふも問
やゑてきゝえ申さむと云しは往し卯月ゐ始ゐゑ
き斯てゝの八月ふゐゑてゝの幽郷眞語をもて來
て國ゐる友のもとよゑ彼女仙の事かく書ゐて
遣せ待りといふふ悟しかゞ云むゝ世ゐ切ゑ泳りて
取る手も遲しと披き見るふ奇くも此を記せる

ぬしの殿の仰せごと承賜はりて其遍ゝ見巡らはく
時しも古くとなく其男ふされ六月ゝ逢て問明せる
事をしかく詳ふ紀取らるる文辞の巧やゝ調
へる學びの力は云ふも更あり其男のけゝい人ぐら
面もちちゆふ今古くふ正目ゝ見ゆ如く物せられし
し眞語のいと辱く三十とせ近く神ふちゆふ願
申せる事の時の古けきば神の古ゆし聞え給ひて
かく知しめ給へゆゆそと尊く覺えてむそこ鋏

亂をして常ふ齋く神の御あれの前ふ捧げて拜み
ぬゝ祈き謝まゝさせたる事は池田氏れそゝゝ居
ゆひて見られあゆゆ如し然るは神世の神さち既
ゝ顕幽わゝゝてゝそ現ゝ見え給ゝ祢神ゆごゝ
常しへふ鎮まゝ坐ゆゝとゝ何ゝ疑ゝ思ふ祈き然るを
今の凡人の其御形を見奉る事ゆ紀故ゝ崩御まし
ゝとおもゝむは最も忌くゝ愚れゆ心ゆりゝゝ
抑神の御上ゝ神の御典を讀伺ふゆゝふ最も尊く

いとも畏れ御事とは想やゝ奉らるれど正目ふ拜
み奉らむふは又殊ふそれ尊さの類ひなく其御稜
威の彌増ゝておはし坐さむとい惟ひ奉るもれうう
然る事からさるを如何せむ志るるをたの善五郎
をのこ又さたふ寅吉と云へる童子れ何まゝ年ゆ
ふ神仙ふ仕ゑ奉れるかどは正しく神の許して其
界ふ入し免給へるかきば殊ふ御靈を蒙れるふぞ
有べき斯て此童子は御暇賜もゝて後た予が家ふ

來きるを數年と免おきて懇ふ問ひきゝろむるふ
我が古道の學びれう宇ふ思ひ得さる事ふ有らば
是はゝ尊く辱れ事ふこそ有れ吾黨の人くよ是
等の眞語を承賜ハゝて今しも神世の神くれ人の
目ふこそ見えまち孫堅石ふ常石ふ御坐にべき
理を辨へ人れ世とふりての後も千世方世も長ら
ふる神仙れ多く坐まれ事をも知ゝ陰ゝ幽世の
有狀の靈く畏き事物も悟ゝ祢らし故ふの書

まゐらせられてる。八田ぬし。はゝ此を傳へられてる池田氏ふも。此悅び聞えゞてら。少う此よしをかき添るたふむ。時と天保の二年といふ年れ八月廿はゝ四日といふ日。

多ひられ篤胤

霧島山幽郷眞語

○今年天保二年の夏おほやけ事ふて薩摩国日置郡和名抄市来乙延喜兵部式驛名中所載市来邪此にものしけるほと夜れる池田武純うゐ江戸の御殿より消息してあゝひはしめて平田篤胤翁を訪ひけるふ翁古史傳と云書を著ハさゝ〳〵ふ付て周をらゝ〳〵事共のあめまと故白尾大人白尾弥藏國孝ハ山陵考をはかをしてよ又かの霧島眞林るの奴僕某う仙境に到れまと云事の始末をも一卷に書綴めてふと云おこせさり。かの仙境の一奇事ハしもてやくよりもれ空えて世れかたゝひまふもはこはやをれと今そをかい泥さんふは河

からさまにもものしかく〻かより淀流もはしるへくなれと
おは昆非(カナラス)はのあるさまふゆとあんとあらているもやし
うさはさまある後かれ某今はいはくふたるやらむそれ
はさけさうあらく絲いとかくとみまそはさしうさはるとも
もてあやみ居るほとはふあやしいうれる関係(チキリ)ようたんん
かれ某をも郎(ヤロウ)はたひやとりにして弱むさるうれしあと
云いんはおろうふおそはるはまかにうしはもと藤ヲ西
伊集院は神川村の百姓(タミ)ありとう学し事をかのくおほえ
けるう甚神川村の名い此市来ふもありてやうて伊集院
の神川と隣まる雨くあの後はおれいうらをこあさりくも

もの学へき事れあふれを法いてふたつ絲見をやとふひ
居るおとをや市来は湯田村の事なりてあ月廿八日因々
伊作田(イサウタ)村に稲りぬ後より神川は半里余の西あれい先あ
るくれ若方つと云へる後呼出しかの一寺事を取おてそ
おををいかふ学及を生やと四ひけれをいてそは神川ふは
結らくは里にこそさるもれは結をきをめてそれみを結
らん郎名い改方つとや結りと云へるいまことふ胸はふ
るくをさふてさふは今くいまはてあひみむあふいを
てよといへをいふとよかのあ後をる事をいうれう扇人
ともの学悔り結をは後ふ結(サウ)らわせて学取さまへとて郎

そを率て来けり其妙のあれくる様にあとかくれもやらぬ
甚怪きを行方なく没れ煙草入提けるさま減ふ古ひたる函
物ありけるを汚をとせれば生やかふたゝまるくよりほ
との男ふて自はおさなをと脇みは兒のおとくなりさて
ひとふるに直朴ふるすふて言語おとかゝこからにかの
物語をいふむけゝきハふけをと始終細うふ語続る事
のかゝとけふ見ゆ見れをとふとより心ゝてかゝやうれ事
はふうりしやふとゝにかくふ回戯記ゝて皆とりたるそ
のむ絵を次くに記事あまりにあやゝき事れにまふ色いもゝハ
もゝくかふへきをさあれい紙ふうれ狐ふとのものゝて志りせゝふやゝ一たひいなを
くそゝくゆひとゝゝくるふひくふふひやふにやを星人ともにも
ふふ巴要ふるもれふて物なの動をも

まめやうふゝてひさゝうも見やゝうふる事をあさに
うゝかそゝきくまもあらにとつあり

○故右のは薩摩国日向郡市来に伊作田村久保園つの生長情
う三男也はゝめは若五郎とそいひゝ寛年れ宮日ふ生れ
たるふよりて産気を虎と云へりふとゝ六拾二歳にあり
ぬ十二三の時より未によくのぼることを始て教ふとに
ゝふさまハにふかゝ猿のやうふりゝと星人ともいへり
さて酒をえ要はうりもえのまにたれゝる事ふとを人
ふみふもえいえぬやとの生質ゝ嵩ハ一二おち狩りたをと
海さいとをこやうふ田畑れ事ともよく勤もの志とふん
拾五歳ふ成りゝ時より務畑の仕業山れ産をを人とあり

てそれより義林寺ふけて仮堂をきり
ありあるとしてはかへたりしら五年はうり前つかと家ふ
い御堂しとあり。

○指出嚴ふなる堂しに時雨り降り降り
とけ七天をかりれる山伏法師の如きものあをさんきり
てたてり若ふ帝云そふもとはふにものそあとひ登伝の
もれありとも我をそよも答ふあとはえ何ら〳〵とてあま
を堂たをい郎かきけちて失ぬ其のちくも回〳〵さまに
ものせ〳〵ことこ三年の写ふるふとひまてありける城人ふも
らんへき心寄おとらけり〳〵とあり。

○かくあや〳〵き事ふ変ありてそれよりいくほともあらぬ
に基のよの曉うと搭ちかく居福ふりてけりけるをふよ
堂若五帝ら名をよふものありけり郎ふあつらひてたちか
れたちふくふやくふのの事を岸八よまてる先寺物ふりと云へし五十はかりの男我ん山神の
清使ありそあを名ふへきことありて追ふはうそ〳〵ふ人
まいとく我ありへふ付て来るへ〳〵といふまくよ終ひて
お切ほと白豆のやうにて大陸ありを堂一町もゆぬやう
ふて大門の行るを入まてゆけん接皮ふ紀ふる家のいと
清くひろられるに十七八をかりれ女六人ありふはまら
をふりとも見ふらかくくみれ盤あらくかき盃をきよらに

そうぎきたるゞあひ迎へ〳〵りさてかの使の男はやく道
にていひけるハ神達はかあらぬあらぬきものあらぬ宝も
よとのゆふへ〳〵をの時にハおかれ小樋を納へと云へと
教へ至りるうはと〳〵てさるおとありて即それを編もり
ぬさて茶と菓子とをあ〳〵てゆ〳〵らひ〻へりのちくのこひ
茶と菓子とのこ也 庭いいとひろくて桃栗柿栂子梨あとやうれも
の成みちて大の一尺はかりあると紙方言むく 大とゆふものこ 餐若き馬
の敢ちかひたるゞひとつ鶏と百はうりむれ居りあの度ふ
ゆるねともハいつもかたる
ことなくあり〳〵とあり さて其小樋ハあ年たりおりけ
とふふひとつおあ〳〵て見むと思ふ心おあらさと〳〵とう

さて沉麻呂侍ハ町に火の災あと〳〵時かの的摩山の釈か
と葉原菓子家もやハ失てその家造り〳〵ける時かしあよ
ゆてもれ〳〵けるわ〳〵かの小樋を紙へよいをあかりあの
うへふおを至りるうその侍ほかれ小樋いつくにう失けん
なくありしとそ その侍ハ沉麻呂のこと
○かく仙境ふゆ初〳〵よの怪ゆんの心おとるはは月に二度
もこゝなもたゝかと時の月に爰れ心ちしてゆけり 沉麻呂
夜中也りれと至のやう
ふあ〳〵ゆ〳〵〳〵あり あらけ年月れるおい左ゆふかへり
居さるゆもるれるう其ゆとてもゆんと男ふ心おあきと
世里斗れみちの行を敢れまふゆう〳〵りとけり

笑而ふ立よりあと寄る附を汚者ことかふえけるけり又
宮中に宿人ふとおを寄やうのけをひ寄る時を速らふも
入やらぬ門はたちや寄ふひふと〜てあれをかゝこに宿
出家ら来てありえやく内へなこのゆふあともなりけるを
その宿人直いいらふる時方もやかりて姿をはみ〜とと
ふくをとゝ形〜にを琴やあふよやとたへふるものゝねとも
きあゆることとありけるを

○女神のおを寄ふれうちは張りふく廣くて目もかゝやく
をうりきよふに作りみかきさうり汚て洞なめくものふと
もみえ寄たくちいさき炉と梱とのをありて炉いいろも

蓋をおかひて火ふとおおい〜たるをみ寄茶菓子ふといい
はもかのゆ十箱ら立ふるまひて棚の中よりとをゆ〜けい
ゆふ さより菓子ともをる時も寄ふその梱よをさめた
まへり神の浦衣い白赤黒ふ多くありてすそふかく引ゆへ
ゆかかゝちれうつく〜きこといえんうふく世にあ
るたくひにあらぬさてはゆかりハ人男れうへの事を
はのゆ車いふられと寄みゆら人ふをかく結り〜とと
又里れ女ふとふたをまうり事ともなとかねてはゆ〜
ふたををはのゆひふてそれを戒めゆふとハふけれと笑
ひの〜〜りふと〜ゆ車はり〜とそいつもさやうのねうう
をのを〜ゆへくもあ

らぬとそこふいてうりていもうれへうる此事
とももあるにやゆうふいとくとかくてらちち

○宮の車る所は四谷山の麓山の麓なり　よりて七八町ばかり上れば方也
とおもはるれど常はひさつきのあげ山にてをふと
もあられぬこと云へりさて奶んと考る糸かさい服色かを
あとよろつ常やうあらぬことれあるを人々も目ふつけて
おのあとをとゝ考て試るものもかりなきと一町はかりゆ
くとみゆるあと新もあくなり〜とそゆうむ考るあうさのと
とみつ〜〜いあにの考く
もあ〜〜〜

○かくとふいされる時そあたた心ふ新を〜き車ふく又音
ひを始〜おともいらぬとひとゝ豆食一歩金ふとやうの

拍二三編ばかり〜車ばかりそはみふた〜ふつかひ考て里の
女ふとにもあさへさり又菓を編ばかり〜車ハたひくあり
けり真深丸ふてよ　似て味ひ甘〜それも人くにくまて今は一もも〜〜法
はと脇家の新ひよりて菓ををひにまねる〜車夜く
ありけりとされとかくるとさはかさくは〜〜む〜〜も〜
そむ紀ふん時は海う月毒菓ふあふそふ考るへ〜と後
に考戒めぬへり　二菓子饅頭やうのもれも編ばかり〜と云へるをも
てたまはり〜ふるへ〜さるは後ようつふ殘をもて市にあ買ふくるも
のはうくまふよりの使人ありと云事あり我方言仙境をかくれふと
のひ夢草もて法ふる
殘をもかりり殘とゝ

○かくは通ひ〜車とさまをふ年の月はかさく人ふもらん

ふとかの市使のをれあの云へりけるを八年までいたく
み居さりその怪庶児侍れ赤松某青侍の湯ふものせられ
〜時あく弱西ふれ〜車ゐり〜よりて世にもれ聞えさり
とそたて其赤松氏より菓子一箱を若ふ命にあとはけて
山祢ふ寄らまし〜うは郎更ゆひてあふさより又こと菓子
をかへ〜物をり〜とそ此車いたやく世ふ聞えけるうた
〜かふさる車ゐり〜といへり又或人青侍ふ猟ふ行かまま
〜時若ちうをまねきて云いるはあくひの猪に於ものさ
いふあらせ給へと山祢ふ行うひやふりかく行紀ゆせ〜
上に於ものふらん時え祢ありとも此山に並ゆさ〜ふと

ゐえふれのやうに云をれてさて菓子一箱をならまし〜に
おは真実れ志ありてのりさふ寄ふと取あへ寄をり〜
もの迎と祢意ハのゆへりとそ
○かく若うり〜時よりいく変とふく行かよひをくいおそ
の八月もまと〜れ二月も行けるう二月の変ふ祢意の室
へるはそおよはふうく変にとまらんの心あふは親子
の道をもたちて来るへし〜りさうりの心あふ寄そともか
くもせよか〜とのゆふまゆく今いふかくもえつう〜まつ
ら〜とてそれよりいとまたまはてゆうりゆりぬまえ
今にふつふうようふへきみちもたえ侍りきといへりうの後の男も

もと世るより好うよひて淫よ多くとゝまれるものふうん姫よりあ十
えかりとみえてるうあ不のちうくもうなる事ゐかり〳〵といへり さて
その女十男ハ甚自と康史仙藩中平敷和云鼎武宗といひ〳〵人ある
へ〳〵といふ説ありさるハ此人元禄年間れ人ゑて芳仙ゑとりて仙術
を学ひ〳〵とつふことは世の人れ考る所ゑて清東遊ゑ書ゑ西拾記ゑも
みえたり 今芳仙山中ゑて猶人ゑとれ〳〵右の人を見ることありとそ
古の事ハ程ふにもの考へ〳〵今島平敷氏に
つゝへ事ゑる四紀ありうつ〳〵とゑとそ

○人の目ふも付てあやし〳〵きあとは岩ゑ郎ゑ菊ありふれ〳〵
なことに人よりハ甚速ゑあ〳〵てけて木を取来ねてひと
つふく〳〵らんと考るにた夢茅やうのもれるゑて木にて
も行ふてもゑにふれたるもれ〳〵てくゝれたよくくゝら
れてさて家ふかへりつく郎おの主と話ゑとそ

件の物語ともハ五月廿九日と六月三日九日と二度我旅

宿ゑ呼取りてまれあたり関取りたる也けるは同〳〵事を
お返〳〵てもたへね又里人より考たゑ〳〵事ともの実否を
も問ひ〳〵ゑふもくくさつね〳〵事ともあゑけゑとま
つはゑふも中考へき事ゑ考ゑと云へりさて常に花香ふ
とものして神を好む事ありやとたつねけるゑさる事は
かりて〳〵ゑ考ゑといへり六月三日四日二度かゑ考ゑ家を
訪ひてかれゑ妻のけゑといへるにもたつぬる事ゑり〳〵
うと内ふてけるゑ物使共せらるゝ事ゑけゑハ何事も知り
ゑ考ゑといへり（ひゑとハ俗ゑ考ゑ。姫ハ姫国と云へり）

○六月廿日伊集院ゑ神川村ゑ事ゑりてゑけゑをやかの美

林ちの葉いたゝかよ弱おゝれい今はあゝにて四方へき
事もあゝ絲と家代ものかゝりともをあらくかゝりける
に演傳門の名自体助と云ものゝ云へるさとはおのゝ号
祖父金兵衛と申もの二十汁の時天狗ふ誘ひ出て書伝山
ふこもゞ三年の間に剱術と教うつ事を習ひ拾ゝりと申
伝て伝りさて天狗より湯ゝりゝとて種の古す汁ふるを
拾伝へて伝りけるゝ事利きるゆやゝきまてふ伝是を祖
父体ちゝと申せゝうそれを紙の又金に用ひんとて紙治
ふあつらへて伝りゝに金巻え巻て紙ひかゝとく拾ふたふ
らゝ拾て伝りあおの是ちもその種はよくゝ見えて伝り

ける〻紙ふくち指き事に伝りさ是と其拾回ゝ形ふう伝
ゝ紙ふせてそを形見ふい伝へて伝りとてとりおてみせ
たるを大かゝのよりは掌ふに志の紙ゝくゝていとう
るいゝく磨きふゝたり拾を二尺はゝりありけゞ山みての金あは
候くゝとものふ
ふりゝとゝるん

○かく紙遊けるに扨六月十九日市朱ゝ年寄役常宇屋九ゝ
と云人我たひ常りを訪ひ来て伝りけるはいふゝ年より
麻兒伝の東ゝ葉剱術師ヤミ能家也病彩ゝひ拾ふ事伝りてかの山邦
ふ葉ちひの事たのゝおあせゞへり改ちつは常ふおのゝ
家にお入ちるもれふ伝是ちやうてその事あつらへ付伝

アーにいとやさきあとをてゐをひゐてかへり侍りぬ其
くさりは白砂糖と真珠丸のあとれものふ侍りきさてそ
れをを脇ーたまひてやうくく病もさそやきゆくるふより
て其汚礼(ヨロコヒ)ふとて菓子一箱ををりたまへるにその箱の隅
の方れを一ッ文とりゆひてそその侍ふ又菓子をを入を
てかへーー柄ちりぬさてかく改をつう侍かるひーいふ
ーー春れとろふ侍りーを今まてかさく秘(ヒメ)おれてもらー侍
らさりーを今君れさつぬたまふおとのさりふけれえか
たをやをれりかくて又ひとりあやーれ事をん侍をーー
さるはそのころおのう泉ふいへまり火紙の相をえをを

たよくくつーーむへきよーー神道の宣へりとて改をつう
告ちらせ侍アーにその時ーも家の葬易せんとて萱とも
行まさはとへ垂侍りーーうは即それをとりのけふとふか
く用心ーて侍りけをは何ことともあく侍りきといへりさ
て前件くさくくのおかくり共はおかくいれをーーことの記
ふるを今ちところの事をは岩重氏うかくはれあくり
おかくるをきくいおそろーれまてあやーくふんおほえ
ける

○縁(チナミ)に記おくくれ秋月向の宮園(諸縣郡)にものーける時
粕木村ある竹士粕木野をあと云へる人のおかくりにる

猪飼の小芎嶽（ヲスタケ）といふふ高園ひより槁ヨリかよふもの〜
みとりるら一日ことふ波振り近けるにあやしきもれあんか
かりたをりるちるは大かさは人のかさちふて賢いとも
くるをみふ色せひみちてそれらいひけるい赤
はもと人のむ考めふりふ今い数百年のむかし世れみと
きたを〜附家をのうきおてとれ山ふ兄弟苦よかくきた
をけるうそれよりふつふ人目のみちをたちて紅ゆふの
くひもれとてて考紙木の実やうれものまて行り活〜か
はおのりからかう形ちもあやしくい成にけりけふ〜も
妹のある示ふ逆えんとて夜中ふたちてもれ〜けるふ思

えんやかるめふあえんとはいうてく我命をは助けよ
かしと浅をおとしてをひけをとその言葉今の世の詞ふふ
そいといふかくやらひけんそのまま星へえせかへ
りて女房のまさかさらひ来て活にそれ女を殺してけをさ
てそれ男いいくほともふくやみ形らふ事ばりて死ふけ
をとうおはを須の事也とて男れ名も常かと忘れよけり
○大隅ふる山ひ肝付郡日新院といふ山ちの仙仙境に函れり
といふ事あり紀ふは麻呂侍人久兼村墓のもれか
たり也妻くハのちふ四ひたく妻へ〜

以上

八田知紀識

かくのおとく書紀して国月廿九日の便りふしみ江へ法か
そしけるふ池田武純やうて平田翁ふみつかはしもてゆて
見せまゐらせしよりにてかへり事しるそれ文、
鬼角秋異去京ゐれ法は安全ら勅諭をもゆ沢と堅文
ふもは国学おゆ翁ゐ名ゆ俗ゐ伝宗ゐ名ゆ
出書紀ゐは七月平田翁へ特ゐ書ゐ名ゆ俗ゐ外紙ゐる
三十年来おとと逆ゐりとて変なもおゐゐゐき出ゐ
篤胤ゐ志ゐふかゐ紀ゐを旁伝の外のとくゐろゐめて
知紙武純をゐてるゆをんゐめゆものゐんゐそむ去こ
の日翁外ゐいひ外居ゐる外の伝ゐ法ゆまれとゐひ

けゆをゐやうてゆめゆ法ゐひ耀引ゐゐゐ外の伝ゐ法ゐたゐの
文を去りてそれ法を法紙のやうに嘆ゐたゐを通ふ
志あゐるゆの外まてあゐ去ゐゐゐ動る事ゐ行ゐゐ
おのを心ゆ品ゐり異外去海人ゐ紙彰御常成とゐふ
人もおゐゐ産ふあり式人市下京内お晩祝陽中ゐ本法翁の門
きりき一産ふて一百ん法ぬいまゐ外にゐゐさる法翁ゐ名をゐ
ゐとて外ゐ外業ゐゐ四海本書ゐ翁亜ゐる外ゐ宮ゐさせゐる
序文ゐと出来ゐもかゐとまりゆさんと云紀序文お
おゐゐゐは京都へ法ゐゐ百ゐ文ゐ亜ゐ其許ゐ去
越ゐ法ゐ法ゐ序文おゐゐ一先其ゐ紀、序ゐゐ紀

て後ろ[illegible]に是にて下[illegible]今日[illegible]氏[illegible]五一[illegible]
まとめ[illegible]紀[illegible]

八月九日

池田武純

八田知紀大人

尾張の国名古屋なる御井才亮といふ人ありて
ゐる年一部といふものを著して年号十七年東[illegible]
芙蓉三年亦芙月の[illegible]江の国秋葉山[illegible]
亦[illegible]つゝみいざなきてお[illegible]ほ[illegible]ぞ亦果
[illegible]ひとゝ免[illegible]ゝ学ぶいとゆる天狗
こゞ海の[illegible]
[illegible]人いひ[illegible]事ども[illegible]
自ら家月の末つ[illegible]ひ物をたゝて七月
とふ[illegible]十二月、初日乃日[illegible]

よびつどへわう殺を若て家を出て屋敷なるの不
ふしぎやうて姿ハ男にてはなかりて又のふし
十月の頃なる板大宮にあつけつまて海に来るが
ほとうやにたなるぬけてひどもつてこてびい霊を
むつかるあり一神の口をかりてかむいうといひて
笠松十三百といふ事ハ髑髏をこなきて魂を
さりよりあるへくあるくどもおどろきあどひてさきく
加賀にも是ハ行ぶこてあるこいとあるる
神の口をかりてあなたと海よ殺をいこと

いこうこうみあつまきあそぶ才戸が師匠
新田義貞祝子父新亮なるど神界の本ぶも
ほうを殺四あぶ中山郎若(云々)はど祈るの
物語ども(いとも)くあふこと人はの霊一人
可怪(カシコキ)きこともさあくあり中山郎ぶどあ
神乃口使ふいぶ新宮をいろ此れ書家の
を記こいあゆまうあ屋敷伊勢うけて國こ
所こ山れ要毋の未まあまでも押ぶて神このちあ
ふぶ板の大麻などいこそばくとも云ふる

よるひるつゞけふりよ海てき家ごとにそなへ齋き
まつりたゝ乃ちとなりても忘きて人ゝ
事をかゝゞゝ記わすれるほどゝそ彼ゝ
こゝ程よつて神の恩のゝたゝへ人ゝなるゝ
ども思ひつゞけて先八月大人薩摩の邦よ
のゞりまゝで来て一泉にゝ居ゐる
もゝとゝゝみ乃つゞいでゝかゝる事をむ傳ると
あゝしゝ歌ゝしきこゝゝやゝゝゝこゝゝも
同じ海のゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

神の札ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又ゝゝゝゝゝゝ西洋人日向霧島山即ち高千穂の峯みな諸ゝむ
ゝゝ登ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
島も皆ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ府よりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃天ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ多く今現ゝ世界ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

実事(マサゴト)をも書つゞけて通俗真語となづけし
一まき編むありしを云ふことを稗しがバそれ男女
老少なくしてひきことなる又は便よけり
ともすればおもひしらせんとてこの才一郎は
事いふまでもなく国ぐにはいふあれども筆つけて
これが附録なりともしてとなんなりけるにとかう
稗しくも訳に詳しくてその筆枝きこえけり
なかなかしが躰のさらひなりしかもその時に杖(アリサマ)を
件(ヲヂく)におつる心あるく思ひし筆眼(マ)のあたり見る

ことくはなしのゆきさつて稗史の名おいてたふとし
なまじいなるもおもひきりてかの末一郎が物語り
ともすれも又乃才亮より読さきかけておもしろき
津くくおもひあかすことをかれはあづまにあれば親族
國の坂里(サカ)筆庵どの来てしれ其のおもしろきのたはぶれ
まれにはなしを合せてしむるに筆ども見まほしく
我の江戸庵の劇なりがたくも流行もしれども
はなしさるひとある有状(アルカタチ)をさとりかしこくてもうつつ
まことの心もくたれども此庵はおもしろく身は

もとよりまなびつとむることすくなからずと世の人にも志ゝ

世にまうさむ大人にこひてまづは真淵を梓にゑらせ

給ふなむ澤井が家なる本をもいろいろとうでて

といふ物にしるしける古記事を経ては[illegible]

ほとんどもいはでその程を熟（ウマ）らにはしらまほし

ふみもあれどさるにも神がたりてなれたる度に

なほよく見えてしかも今はまだみるさも

なしと思ひつゝ出て書のゝる尾張にかくなむ

尾張人三浦[illegible]書

三浦先生著

# 大矢田神蹟考

近刻　全一冊

此書ハ美濃國大矢田村なる天若日子下照姫天探女等の神蹟及藍見川の河なる巻山の考にて古事記傳の附録とすべき書なり


發行書肆

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛

同　通二丁目　山城屋佐兵衛

西京麩屋町通寺町西入　池村久兵衛

同三条通寺町東入　丁子屋源次郎

大坂心齋橋筋北久太郎町　河内屋喜兵衛

同　安土町　河内屋和介

尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

同　通四丁目　永樂屋正兵衛板